

ヒメウラナミジャノメ

Ypthima argus

ジャノメチョウ科

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(草花)
在来種

(草花)
外来種

哺乳類

(鳥)
水辺類

(草原・
シダ
樹林)

名前の由来

ヒメは小さい、ウラナミジャノメは翅の裏側が波模様のジャノメチョウの意味と思われる。ジャノメは、翅の目玉模様が蛇の目のようだというところから。

漢字名：姫裏波蛇目



ヒメウラナミジャノメ

撮影-吉原利之

特定種

該当なし。

形態的特徴

前後翅の裏面に波状の模様があり、眼状紋の目立つやや小型のジャノメチョウ。



ヒメウラナミジャノメ。表（左がオス、右がメス）



ジャノメチョウ。オス（左が表、右がウラ）



ヒメウラナミジャノメ



ヒメウラナミジャノメ。ウラ（左がオス、右がメス）

チョウ標本：吉原利之氏作成・所蔵

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
卵期				■			■					
幼虫期	■	■			■		■	■	■	■	■	
蛹期			■			■						
成虫期				■	■	■	■	■				

生育環境・分布

平地から山地の林縁、草原、公園、堤防など、人家付近にも多い。草原や田畠の周辺など比較的明るい環境を好む。

分布：国外分布は、ロシア極東地域、中国大陸、朝鮮半

島、台湾。国内分布は、屋久島以北の日本全土。北海道内分布は、全域。

十勝地方では、平野部から山間部まで広く分布し、普通に見られる。数は多い。

繁殖生態・寿命

年1～2回（一部）発生。成虫は6月中旬～8月中旬、（9月～10月）に出現する。越冬態は幼虫。

母蝶はブッシュの中に飛び込むようにして葉に止まり、葉の間を地表近くまで降りて、あまり対象を選択せず、イネ科植物、その枯葉、シダなどに産卵する。このことから、単に産卵したと言うだけでそれが食草とは断定で

きない。草原性の蝶にはこのような習性のものが時折見られる。

幼虫はたいへん不活発で、飼育条件下では夜間に葉を食う。日中は食草根際の枯葉の間などに潜んでいる。色彩も枯葉に似ているため見つけづらい。蛹化は枯れ枝などで行われると考えられる。寿命：不明。

他生物との関わり

*幼虫はクサヨシ、ススキ、シバムギ、スズメノカタビラなどのイネ科植物を食草とする。

*成虫の吸蜜植物はヒメジョオンなどのキク科をはじめ多くの花を訪れ、まれにウツギ類、シモツケなどの低木の花にも来る。

*成虫の天敵としてハナグモ類が知られる。幼虫や蛹の採集例が少ないため、寄生の例はほとんど知られていない。

幼虫の食性（食草）

クサヨシ、ススキ、シバムギ、スズメノカタビラなどのイネ科の多くの種類。



クサヨシ。ヒメウラナミジヤノメ幼虫の食草の一つ

興味深い話

■ヒメウラナミジヤノメなどのジャノメチョウの仲間に目玉模様がある。ある学者によれば蝶や蛾の目玉模様には鳥などの捕食者をたじろがせ、攻撃をひるませる効果があるそうである。しかし別の研究者によると捕食者に対する適応として生じたわけではなく、翅の基本的な模様の一部として、本来存在していたとも考えられると

いう。

■飛び方が特徴的で、低い空間をリズムを刻んではねるように飛んでゆく。■十勝地方のアイヌ語では、ジャノメチョウ類を「トウレプアカムマレウレウ」、チョウ類一般を「マレウレウ」という。

配慮事項

特になし。

参考文献

- 「原色蝶類検索図鑑」猪又敏男 北隆館 1990
- 「日本のチョウ」海野和男・青山潤三 小学館 1981
- 「原色昆虫大図鑑 I (蝶蛾編)」北隆館 1978
- 「名前といわれ昆虫図鑑」栗林慧・大谷剛 偕成社 1987
- 「十勝の蝶」大和与三追悼集 十勝蝶の会 1993
- 「埼玉蝶の世界」埼玉昆虫談話会編 埼玉新聞社 1984
- 「北海道の蝶」永盛拓行・永森俊行・坪内純・辻規男 北海道新

聞社 1986

「原色日本蝶類生態図鑑 (IV)」福田晴夫・浜栄一 他 保育社 1984

「北見の蝶」木村辰正 北見市教育委員会 1994

「知里真志保著作集 別巻 I 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編」知里真志保、平凡社 1976

魚類

底生動物

爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(草花)

(外来種)

哺乳類

(鳥類)

ワシ・タカ